

☆第96回上智大学哲学会大会のお知らせ☆

今春、下記の要領で第96回上智大学哲学会大会を開催いたします。万障お繰り合わせのうえご出席くださいますよう、ここにご案内申し上げます。

日時：2022年6月26日（日）13:00～17:30

会場：上智大学四谷キャンパス7号館14階特別会議室

★プログラム

I 研究発表 13:00～15:15

○大橋一平（本学大学院文学研究科博士前期課程）

無知と信頼性の認識論

——フェミニスト認識論の観点から

○羽鳥拓実（本学大学院文学研究科博士前期課程）

意識研究における圏論の可能性

○持地秀紀（本学ヨーロッパ研究所特別研究員）

思考を言葉にすること

——ベルクソン哲学における作文の問題

——休憩——

II 講演 15:30～16:30

○中島隆博（東京大学）

世界哲学としての中国哲学

III 懇話会 16:30～17:30

於：大会に同じ

参加自由、参加費不要。コロナの感染状況等により中止する場合がございます。

※感染予防のため飲食は禁止しております。マスクをご着用のうえ、ご参加いただきますようお願いを申し上げます。

☆講演要旨

世界哲学としての中国哲学

中島隆博（東京大学）

文学における「世界文学」、歴史学における「世界史」もしくは「グローバル・ヒストリー」という新たな試みがなされるなか、哲学にもその問いは問われている。すなわち、西洋中心主義的な哲学理解を超えて、東洋哲学や地域哲学を「世界哲学」としてどう理解し直すか、ということである。無論、西洋対東洋といった単純な二項対立が維持できないことはいままでもない。二項対立を前提した上でなされるような比較哲学といった試みは問い直されなければならない。その上で、東洋哲学を世界における諸々の地域哲学という理解から解き放ち、新しい仕方で普遍に寄与するものに鍛え直す必要がある。それは同時に、西洋近代の哲学の構えそれ自体を変容させるものである。

ここでは、まず世界とは何かを考える。マルクス・ガブリエルによる批判や、近年の中国における、言説の権利としての天下概念の主張を紹介した上で、見えるものを支える見えないものの地平としての世界を提示する。続いて、世界哲学が考える普遍について、フランソワ・ジュリアンによりながら、*l'universalisable* とは異なる *l'universalisant* としての普遍について考える。それは、普遍的なものを創造し産出するプロセスとしての普遍化である。その上で、世界哲学という複合語の意義について論じる。それは、「世界における諸哲学」であるとか、「世界的な哲学」といった意味ではなくて、世界と哲学という二つの概念の複合から新しい哲学的な実践を始めようというものである。その実践は、自己と世界の変容の問題に通じていくものだ。

この変容の問題を、ジル・ドゥルーズと『莊子』において具体的に検討してみる。ドゥルーズの若い時のヒューム論や晩年のスピノザ論を参照すると、そこには変容が道徳や倫理に向かうという方向性が見られる。それに対して、『莊子』における変容は、非倫理的な変容であり、方向性を欠いたものだ。この『莊子』の変容の議論を、儒家的な倫理や、西洋近代の道徳といったものを脱構築することとして理解してみたい。それは、〈他者の立場に立たない〉ことを徹底的に考えることで、ある特定の人々にとって都合のよい倫理や道徳に抵抗することでもある。

最後に、中国哲学という概念についても検討する。それは胡適に代表される、近代中国で考案された中国哲学とも異なるものだ。それは、決して人を安心させてくれない概念であり、哲学との間に強い緊張関係を生じさせる場所の名前である。

☆研究発表要旨

無知と信頼性の認識論

——フェミニスト認識論の観点から

大橋一平（本学大学院文学研究科博士前期課程）

今日、特権的立場にある者の無知に基づく差別的発言やハラスメントが、しばしば問題となっている。その際われわれは、そこでなされたことに対して何らかの悪質さを見て取るがゆえに、反発を覚え、非難を差し向けることがある。しかし、そこで働いている無知の悪質さを主題的に論じることは難しい。従来の認識論において、無知という問題は、知識の問題ほど主題的には論じられてこなかった。多くの文献で暗黙の了解となっている支配的な標準的見解は、「無知とは知識の欠如あるいは不在である」というものだ。しかし、そのような受動的な無知の定義では、無知が特定の社会の構造や、そこでの認識実践から積極的に生み出されるものでもあるという点を理解することができない。無知はいかにして、倫理的に悪い動機に基づく認識実践から生み出されるのか。また、無知はいかにして、抑圧的な社会構造のなかで維持または再生産されるのか。さらに無知は、どのような認識的な不正(Epistemic Injustice)をもたらすのか。

フェミニスト認識論(Feminist Epistemology)と呼ばれる議論領域は、従来の認識論に対して、このような問題を投げかけてきた。本発表の目的は、フェミニスト認識論の主要テーマの一つとして論じられてきた「無知の認識論」という問題を紹介しつつ、これまでの議論状況を整理し、新たな視点から無知の問題に対処していく指針を明確化することである。フェミニスト認識論は主に英米圏において盛んに論じられているものの、日本においてはほとんど紹介されていない。それゆえ本発表ではまず、(1)フェミニスト認識論の概略と、フェミニスト認識論が問題にするものについて確認する。そして、(2)フェミニスト認識論の議論にとって、なぜ「無知」が固有の問題領域を形成するのかについて論じる。それを踏まえ、(3)無知の認識論が問題とするところの「悪質な無知」についていくつかの観点から整理を行う。次に、(4)悪質な無知がどのような社会的な構造によって形成されるのかについて、「認識的信頼性」との関わりから論じる。最後に、今後の議論への発展として(5)悪質な無知の問題に我々がどう対処すべきなのかという点に関して、(a)非難と責任を区別すること、(b)そして各人が「共有された認識的責任」のもと、それぞれの社会的文脈に即した認識実践を果たしていくために、自らの認識的-社会的立ち位置について意識化していくことが重要であると論じる。フェミニスト認識論における無知についての議論は、無知が生じる社会構造のメカニズムについて明らかにすることで、特権的地位にある人間の無知についての非難を可能ならしめ、個々人が自らの社会的立場を認識し、それに基づいた認識的責任を自覚し、実際に悪質な無知に抗する認識的実践を行うことを可能にするのである。

*

意識研究における圏論の可能性

羽鳥拓実（本学大学院文学研究科博士前期課程）

今日、意識の神経科学において圏論が注目を集めている。これは、圏論によって、科学的に記述可能な意識の領域が拡張されることが期待されているためだ。圏論では対象間の関係性を重視し、それを射によって表す。そして、圏論では関手を考えることによって、圏と圏の見かけ上の差異を超えて、構造的観点から共通点を考えることもできる。実際、自然変換を用いて、関手と関手の間の共通の構造を見てとることもできる。他方、集合論では、集合に属する要素と別の集合に属する要素との写像を考えるわけだが、「要素ありき」であり、要素である以上、要素の性質もまた仮定されていなければならない。

これまでの心の哲学の問題では、素朴な集合論が根底にあった。例えば、同一説では、「c 繊維の発火」と「痛み」は等しいのかということが考えられてきた。この問題では、ニューロン全体の集合の中の要素（c 繊維）とクオリアの集合の要素（痛み）との間の写像が想定されている。しかし、今日の神経科学では、意識は単一の組織から生じるのではなく、脳全体の神経ネットワークから生じていると考えられている。言い換えると、意識という現象においては、全体の構造と関係が重要だということである。このようなことを踏まえると、集合論の見方では、脳全体の情報構造とクオリア全体の構造との関係を扱うことは難しいだろう。

そこで本研究では、従来の心の哲学の問題に対して、圏論的な見方から再構成を行うことによって解決を試みる。脳全体の情報構造とクオリア全体の関係から、集合論的に考えられてきた問題を圏論的問題として捉え直すことが可能になる。例えば、ニューロン圏とクオリア圏を考え、その間の関手を考えることによって、ニューロンの構造とクオリアの構造を対応づけることが可能になる。現在の神経科学の知見を踏まえつつ、この圏論的な見方を意識の哲学の問題に応用することによって、従来の心の哲学に一石を投じることになるだろう。

＊

思考を言葉にすること

——ベルクソン哲学における作文の問題

持地秀紀（本学ヨーロッパ研究所特別研究員）

一般的に、ベルクソンは言語に対して批判的な立場をとった哲学者として知られている。第一主著『意識に直接与えられたものについての試論』（1889）では、われわれの意識内に与えられたものを言葉で表現することは、時間的なものを空間的なものに、個別的なものを一般的なものに翻訳する不当な行為として論じられている。こうした言語批判は以降の著作でも繰り返

されており、思考を言葉で、あるいは直観を概念で表現することはできない、というのがベルクソン哲学の根本的な主張のひとつとされている。

しかし、思考を表現するためには、それを言葉にしなくてはならない。そして、そこにはある種の「努力 (effort)」が認められる。実のところ、ベルクソンもこうした言語化の営みを全面的に否定していたわけではない。たとえば第四主著『道徳と宗教の二源泉』(1932)では、哲学者とは「文筆家 (écrivain)」であるとしたうえで、「彼が作文する際の精神状態を分析することは、神秘家が神の本質そのものと見る愛が、如何にして同時にひとつの人格であり、ひとつの創造の力でもあるのかを理解する助けとなるだろう」(p. 268-269)と論じられている。ここでは、哲学者の作文行為と神の愛との間に何らかのアナロジーが想定されており、思考を言葉にする行為が積極的に価値付けられているのである。

本発表の目的は、ベルクソン哲学において思考を言葉にすることが如何なる点で積極的な行為として捉えられ得るかを再考することにある。ベルクソンの著作には書くことや作文することに関する議論が少なからず散見される。しかし、それらがいずれも間接的な言及や副次的な著作において展開されたものであることから、彼の作文論に注目した先行研究はほとんどない。また、ベルクソン哲学における直観の言語化不可能性については、しばしば直観と言語の間に位置付けられる「イメージ」という中間媒体の重要性が指摘されてきた(たとえば Bréhier [1949])。しかし、たとえイメージを媒介することで直観と言語の間の隔たりが解消され得るとしても、言語の価値は直観に対して依然として消極的に捉えられたままである。これに対して本発表では、直観の言語化不可能性を一旦認めたとうえで、それでもなお直観を言語化することの積極的な意義をベルクソンがどのように見積もっていたかを探っていく。それにより、神的な愛の本質の理解へと通じるような哲学者の作文行為とはどのようなものであるのかを考察したい。